様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　６　月　３　日現在

機関番号：１２１０１
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：２０１０　～　２０１２
課題番号：２２５２０７８５

研究課題名（和文）植民地台湾における心象地理の形成ー植民地主義の展開とその帰結ー

研究課題名（英文）The Imagined geography under the Japanaese Colonial Rule in Taiwan

研究代表者
葉　せいい　　（YEH, Chienwei）
茨城大学・人文学部・准教授
研究者番号：30242332

研究成果の概要（和文）：本研究では日本統治下に置かれた台湾の人々が、植民地政策や教育によって、いかなる日本、台湾および世界観を抱き、アイデンティティ形成を行ったのかを、教科書や新聞、雑誌などの分析から明らかにした。同化政策や皇民化政策下、日本化の推進と愛国心の育成が謳われ、日本への憧憬の念が培養される一方、台湾への郷土観も育まれ、それら二つの「郷土愛」の葛藤こそが、植民地の人々のアイデンティティの根本をなすものといえる。

研究成果の概要（英文）：This study aims to explore the identity of colonized people in Taiwan by analyzing textbooks, newspaper and magazines published during the Japanese colonial period. The Taiwanese people were encouraged to ‘Japanize’ and the patriotism was cultivated through the assimilation policy, accordingly, the admiration for Japan was evoked. On the other hand, people strongly emblaced local identity. Thus, the colonized people had condtradicting identities torn between Japan and Taiwan.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	700,000	210,000	910,000
２０１１年度	500,000	150,000	650,000
２０１２年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：人文地理学・人文地理学
キーワード：植民地、台湾、地理教育、アイデンティティ、ポストコロニアル、心象地理

１．研究開始当初の背景

筆者は、植民地を人文地理学的に探究するなかでまず取り組んだのは、植民地政策による植民地都市の景観や建造環境の変化など、ハード面における植民地化過程をまず分析することであった。しかし植民地の本質を追究していく上で、その植民地権力によって築かれた空間に生きる人々に着目する必要があることを認識することとなった。そこで、植民地都市に生活する人々の生活空間に焦点をあて、とくに植民地研究においては等閑視されてきた女性が、いかに植民地空間を認識し日常生活を営んでいたかを分析し、植民地政策や教育が空間認識や使い方に多大な影響を与えていたかを明らかにした。

以上のようなこれまでの研究成果をふまえ、本研究では植民地における地理教育や公共政策が、植民地の人々の宗主国日本や台湾さらには世界をいかに認識していたか、それがアイデンティティ形成にどのような影響

を与えたかを考察することとした。植民地において教育は、植民地の人々の人格形成や思想・理念に深刻な影響を与えたことは既存研究においても明らかにされていることであるが、地理教育に関しては未だ解明されてこなかった。地理教育は、植民地だけではなく日本内地においても愛国心の育成や郷土愛の喚起を促す上において、重要科目として位置付けられていたものである。そこで、本研究では地理教育を中心とした教育や公共政策を通じて人々がどのような地理認識（日本・台湾・世界に対する）を抱き、それがアイデンティティ形成につながっていったかを分析していきたいと考えた。

２．研究の目的

本研究は、日本植民地統治下台湾における人々のアイデンティティ形成について、地理教育や公共政策の影響から分析するものである。植民地台湾においては抗日的ナショナリズム形成がみられたが、その一方で日本への憧憬を含む言説が多く発表された。これは植民地台湾における徹底した同化政策の中での教育やプロパガンダによる愛国心育成の「成果」ということができる。特に地理教育は愛国心の喚起を促す重要な役割を果たした。植民地における植民地政策と地理教育の分析から、植民地における人々のアイデンティティ形成について明らかにすることが本研究の目的である。

（１）先行研究の整理

本研究は地理学や地理教育だけでなく、植民地研究、植民地主義研究およびナショナリズム研究と深く関連し、それぞれの分野に大きく貢献できるものといえる。まず教育史において、植民地における地理教育はほとんどその対象とはされてこなかった。しかし実際には植民地教育の実践は、日本の教育界へも還元されている側面もあり、植民地地理教育の検証は、日本における地理教育の発展過程を考察する上でも重要なことだといえる。植民地の地理教育に関する研究は、寺本潔（1985）の「総督統治下朝鮮の国民学校における地理教育―国民科『環境の観察』について―」がある。寺本は、朝鮮の国民学校における地理教育を考察し、その教育方法が児童中心・生活中心の近代的・合理的側面を有していたことを指摘、さらに国民学校の科目の一つであった「環境の観察」について分析を行った。近年では沈正輔（2003）による「文部省と朝鮮総督府の国民学校国民科地理に特設された『郷土の観察』と『環境の観察』の比較分析」においては、日本における「郷土の観察」、朝鮮における「環境の観察」という地理科目について、両者の教育制度と内容に関して比較研究を行っている。その中で沈は、朝鮮で「環境の観察」という名称がもちいられたのは、「郷土」という名称が、植民地朝鮮の児童に対して使用する場合、その居住する土地に対する愛着や郷土意識を呼び起こし、独立意識を喚起する可能性があるためという指摘を行っている。しかし統治方針と地理教育との関連については検討されてきていない。

日本の植民地教育については、多くの業績が蓄積されてきた。Patricia Tsurumi(1979)の‘Colonial Education in Taiwan, 1895～1945’（Harvard University Press）は、台湾における教育システム、教育方針、教育内容を植民地政策と関連づけながら植民地教育を論じたものとして古典的研究である。同じく Tsurumi(1984) による“Colonial Education in Korea and Taiwan”（Princeton University Press）は、日本の近代教育史における植民地教育の位置づけ、教育システムの階層化を分析し、さらに植民地主義に対して教育の及ぼした役割について台湾と朝鮮の比較研究を行っている。また、駒込武（1996）の『植民地帝国日本の文化統合』（岩波書店）は、日本の異文化支配のための同化政策とそれに基づく教育政策・言語政策の実践を台湾・朝鮮・満州について分析している。異文化が逆流することを防ぎつつ日本人という同一性の下に植民地の人々を「文化統合」していったのが教育であったことを明らかにしたものである。また陳培豊(2001)の『同化の同床異夢―日本統治下台湾の国語教育史再考』（三元社）は、同化政策の中心的役割を担った国語教育を植民地の人々がいかに受容していたのかを、植民地支配下における近代化への希求と支配への抵抗という相克から明らかにしている。支配者側からのみならず、被支配者の側から教育をとらえた研究である。

植民地時代に教育を通じて植えつけられた地理的概念は、植民地時代だけでなくポストコロニアルの時代においても生き続けたこと、それが戦後における日台関係にも影響を及ぼしていることはたしかである。今まで焦点が当てられることのなかったこの点について、検証していく必要があろう。

しかしながら、植民地教育に関する従来の研究の多くは国語教育が中心となってきており、地理教育については注意を払われてこなかった。しかし地理は植民地支配者にとって異文化統合を推進する上においても、また植民地の人びとの宗主国への‘愛着’を育成する上でも重要な科目だったことは強調されてしかるべきである。その意味でも地理教育を丹念に分析し、それが教育においてだけでなく、植民地統治においても人々の地理的概念が重要な役割を果たしていたことを明らかにする必要があると考える。

（2）何を明らかにするのか

本研究が明らかにしたいのは、植民地の人々が植民地体制に組み込まれていく中で、日本に対しどのような地理的メージ＝心象地理を抱いていたのか、それが人々のアイデンティティ形成にいかなる役割を果たし、また植民地後において、人々はもとより社会に対してどのような影響を及ぼしているのかについてである。

植民地教育がいかに植民地の人々の心理に作用し、「同化」の推進に寄与したのか、特に地理教育の果たした役割について明らかにする。地理教育がもたらした結果として人々が抱くにいたった心象地理は、人々が世界の中にそして日本の中にいかに台湾を、また自分自身を位置づけたのか、を示すものである。

植民地社会において人々が根本的に突きつけられていた問題は、「自分が何者であるか」ということであったと考える。自己を同定していく上で、教育の果たした役割は大きい。地理教育は人々が学校教育を通じて獲得した日本や世界についての知識をイメージとして具体化させた科目であった。地理教育が単に教育効果としてもたらした地理的知識だけでなく、人々が抱くにいたった世界、日本そして自分たちの居住する台湾に対する心象地理を聞き取りや生徒による作文、雑誌記事、小説、随筆などの著述から明らかにし、植民地の人々のアイデンティティ、すなわち「自分が何者か」という問いへの答えを導き出したい。

（3）本研究の意義

本研究の特色は、きわめて学際的な研究だということにある。本研究は、地理教育、植民地教育・植民地政策、そしてアイデンティティ研究などの分野の研究方法および研究成果を基礎として研究を進めることにより、従来明らかにされてこなかった植民地の人々のアイデンティティ形成について探求するものである。人々が否応なく組み込まれていった植民地体制において、人々の適応には受容、妥協、抵抗などさまざまな形があった。反体制としてのナショナリズム形成がある一方で、日本による同化政策に与し台湾人のナショナリズム形成に尽力する動きもみられた。本研究の目的は、人々が植民地社会においていかに植民地主義に対して「適応」したのかを明らかにするものである。当時の台湾の人々が地理教育を通じてどのような自画像を描き、愛国心を抱くに至ったのか、またそれが正当化されて植民地の人々に対して示されたのかということは、植民地主義の意味を問う上でも重要である。地理教育の実践を含めた植民地主義の意味を再考することは、歴史的意義のためだけではなく、現代においてどういう意味を持つのかを考える上でも不可欠といえる。

３．研究の方法

本研究においては、文献調査および聞取り調査を中心に研究を行った。

（1）文献調査

文献調査は、台湾にある国立中央図書館台湾分館（現在は国立台湾図書館）、国立師範大学附属図書館、日本では国立国会図書館で行った。国立中央図書館台湾分館には、日本植民地期の総督府関係の資料が収蔵され、逐次デジタル化されている。また国立師範大学には教育関係の文献のほか、また植民地教育に関する修士論文・博士論文などが多く、台湾における植民地研究に関する研究動向の把握に有用であった。

国立中央図書館台湾分館では、植民地期の主に地理教科の教科書や指導書を収集したほか、『台湾教育』などの教育雑誌『台湾公論』『台湾婦人界』、『婦人と家庭』『台北州時報』など、家庭における日本化や愛国心育成を推奨した記事が多くの掲載されている雑誌及び台湾日日新報などから地理教育や郷土教育、愛国心に関する記事を、また台湾各地の各時期の地形図、市街図、主題図などを収集した。国立国会図書館では、日本で発行された教科書や地図類、婦人雑誌記事を収集し、植民地発行のものとの比較を行った。

（2）聞取り調査

また文献調査のほかに、植民地下の台湾において教育を受けた人々への聞取り調査をのべ５名（男性２名、女性３名）から行った。いずれも数時間にわたる詳細な質的調査を実施した。聞取りの内容は、受けた教育やその印象、その当時の学校の様子、教員との関係、台湾人および日本人同級生との関係、家庭教育や家庭における行事・習慣・しきたりと日本文化の浸透、近隣における「日本化」の状況、台湾の伝統行事の実践、さらに当時の自分（小学生低学年～中学生）が日本をどうとらえていたかについてである。聞取り対象者は 70 歳以上で台北の公学校および小学校、高等学校、高等女学校で植民地期に教育を受けた人々であった。

４．研究成果

本研究の成果を (1)植民地主義と地理教育との関連、(2)地理教育の内容、(3)地理教育による影響、(4)愛国心と人々のアイデンティティ形成の観点から整理していきたい。

（1）植民地主義と地理教育との関連

地理学は植民地主義との関連が深い学問であった。地理学的知識は、帝国主義的拡大や戦争において不可欠だったからである。地理学はある意味で、帝国主義や戦争と共に成長した学問でもあった。日本においても地理学会の成立と帝国主義の発展とは深く関連

している。いずれも近代国家としての日本の登場を意味していた。地理は、国家アイデンティティを目覚めさせる科目のひとつとして重要視された。明治政府は教育への統制を行い、小学校と中学校の教科書は、1903 年から文部省によってすべて編集されることになった。

一方で伝統的に土地の景観を詳細に観察し描写する学問であった地理学は、郷土への愛着を喚起・強化するものとしてしばしばナショナリズムと結びついて発展してきた。その土地独特の景観や風景は人々の自分の土地に対する誇りと愛着を育み、したがって人々のアイデンティティは、風景と深く結びついて形成されてきたのである。郷土愛や愛国心は、こうした風景の集団化によって培養されるものであった。このような地理学の学問的特徴は、植民地の同化教育において利用されることとなった。すなわち、植民地の人々に宗主国に対する「愛国心」を育成する役割を地理学は担っていくことになったのである。

（２）地理教育の内容

①地理教育の目的

上述のように、植民地政策のなかで地理教育は重要な役割を担うこととなったが、植民地統治初期、台湾人向けの小学校（公学校）においては、その目標は「地理は本邦及本島と直接の関係を有する地方の自然及人文に関する知識の一般を得しめ本邦国勢の大要を理会せしめ処世上必須なる事項を知らしむるを以て要旨とす」とのみ記されているが、同化政策の施行後、1922 年発令の台湾公立公学校規則（府令第 65 号）においては、「地理は地球の表面及人類生活の状態に関する知識の一斑を得しめ本邦国勢の大要理会せしめ兼て愛国心の養成に資するを以て要旨とす」との一文が冒頭に付け加えられている。地理は、「比較的著実に、落ち付のある、真正なる愛国心の養成に都合のよい」（台湾教育沿革誌，1939，p.267）科目とされたのである。

②地理教科書の内容

公学校における地理教科は第五学年で日本地理、第六学年で日本地理に加え、支那、南洋、その他の外国地理の大要を修得することが目標とされた。また第四学年では地理教科のなかで「郷土の観察」が取り入れられた。郷土地理が国や世界の地理を理解する上での基本と認識されたのである。ここでの郷土は台湾の各地域であり、昭和 12 年ごろまで台湾各地方の教育会などでは郷土読本を編纂した。皇民化政策期（1936～1945）に入ると、地理教育は国民科に組み込まれ、植民地の学童も日本臣民として必要な地理的知識の修得と愛国心の育成が地理の主たる目的となった。地理教育の目的は、(1) 国勢の大要を明らかにする、(2) 国民的精神を確立させる、(3) 愛国心を陶冶する、(4) 国際的精神を涵養する、(5) 国運の発展に資する、の 5 つが設定され、とくに国勢の大要を明らかにすることと愛国心の養成は特に重要なものとして位置付けられた。

すなわち、国勢を理解し、国際精神を学びそれによって「愛国心」を育成することが地理教育の目標であることが強調されている。さらに日本をめぐる情勢の変化に対応して、地理教育は国際精神の喚起、国勢の厳正批判、国民性の理解、経済観念の養成、海外発展思想の涵養の観点からの教育が必要であると主張された。「国際精神の喚起」とは、「健全なる国家主義的活動は公民としての義務であり、国際精神の喚起も、自国を忘れて飛躍してはならない」ということを意味する。「国勢の厳正批判」は、海外諸国の国勢を理解することにより、日本の世界的地位を相対化することをいい、「国民性の理解」とは、他国の国民性を理解し、比較し、優秀なる国民性を持つ国民の形成する優秀な国家建設に邁進させるために必要なことだとしている。さらに「経済観念の養成」は、現在の人類活動は、経済を基調としていることを体得させ、日本の経済力や経済組織、世界的地位を理解し、経済が国勢においていかに重要かを考察させることであり、「 海外発展思想の涵養」は、日本の国情における問題は人口問題・食糧問題・職業問題であることをふまえ、海外主要諸国の海外発展の大要を理解させ、その地理的事情を明らかにすること。こうして地理は「皇国民の錬成の為の地理であり、我が国土国勢を理解し、国土愛護の精神を養ふのが主眼」とした科目となった。ここで地理は「皇国地理」と位置付けられ、その理念は「我が国土国勢を正しく認識する事によってはじめて東亜及世界に於ける皇国の使命が自覚され悠遠なる皇国の理想を自覚し、自ら国土愛護の精神が養われる」というものであった。当時、大東亜共栄圏や東亜新秩序といった国家理念を掲げ、その膨張主義を正当化する上で、地理は適した教科であったといえる。

（３）地理教育による影響

1941 年発行の公学校の地理教科書の第一章「大日本帝国」では、「我が国には暑い所も寒い所もありますが、大部分は気候が温和です。又一たいに雨が多く、土地も肥えてゐますから、産物がたくさんできて、まことにくらしよい国です」という記述にみられるように、「くらしよい」「景色がよい」といった表現が多用されている。また皇民化政策期における地理教育は、上述のように皇国地理を理念として掲げ、「大日本帝国」に関する記述は、それ以前のものと比較して詳細になっている。たとえば昭和 16 年版の公学校地理教科書では、大日本帝国の版図が大陸や南洋

まで拡大していることが示され、さらに人口に関して次のように記述されている：

「国民の総数は約一億で、その大部分は大和民族であるが、朝鮮には約二千三百萬の朝鮮人、台湾には約五百三十萬の台湾人がいる。又北海道には少数のアイヌ人、樺太には少数のアイヌ人とその他の土人がいる。諸外国に移住している大和民族は約百万である」

日本の広大な領土とそこに内包する多様な民族について、円グラフ入りで示されている。当時の日本は、世界に誇れる「多民族国家」だったことがここで強調された内容となっている。つまり地理は、宗主国日本について基礎的知識を獲得させ、「支配者」たる日本が「強大かつ広大な国土をもつ国家」であることを地図によって可視化し、内地のみならず植民地の人々にも認識させることのできる有用な教科であった。日本を中心とする大東亜共栄圏、東亜新秩序の中に、台湾、朝鮮などの植民地やアジア南洋諸国が包含され、皇国化していくイメージを、地理教育を通じて描いていったのである。それが国民的精神の確立、愛国心の育成へとつながっていった。これは地理に限らず国語や歴史などの重点教科でも同様であった。

（4）愛国心とアイデンティティ形成

当時の学校教育を受けた台湾の人々は「日本というのはすばらしい国だ、ということが学校で当たり前のように教育されたので、日本への憧れは強かった」と口々に語る。改姓名制度により中国名から日本名へ改姓する家族も多かったが、なかには改姓名を頑として拒否した父親に対して「私は本当の意味での日本人になりたい。改姓名してほしい」と心の中で切望していた、と語る女性もいた。教育を通じて無意識のうちに日本という国家の相対的優越性が、子供たちの心象地理に影響を与えたことはたしかである。

一方で植民地政府は、女子教育の強化を図った。その目的は、母であり妻である女性が家庭において「皇国民錬成」「愛国心育成」を推進していくことを期待したからである。当時の新聞には、「女子の皇民化徹底を図る」（台湾日日新報、1939 年 4 月 14 日）、「皇國の進展に挺身　婦人教化陣を拡充　女子教育の日本的訓練と家庭生活の日本化」（同、1941 年 7 月 25 日）、「母強ければ国強し　婦人よ心構へはよいか」（同、1943 年 5 月 7 日）など、女子を皇民化促進の担い手と位置付け、「皇民錬成の透徹を図るべく時局下皇民錬成の重要な一翼を担う婦人教化陣を一層強化して教育強化の実を挙げ（中略）この未曾有の大試練を克服して皇国の進展に挺身せしめることとなった」（台湾日日新報 1941 年 7 月 25 日付記事）として、皇国錬成に女性を動員していくことを謳う記事が 1940 年代以降多くみられた。この動きにともない、各女学校では慰問団の結成、挺身隊の活動が活発化し、皇民奉公会の下部組織としての「皇民奉公女子青年訓練所」や「愛国子女団」さらに若年層の「愛国少女団」が各地で次々に結成され、女子が皇民化活動に動員されていくことになった。

このような教育を受けてきた植民地の人々は、「日本」をどのようにとらえていたのだろうか。聞取り調査から明らかになったことは、多くの若者は日本への憧憬の念を抱いていたこと、また自分は「日本人だ」と疑いもせず信じていた、ということであった。彼／彼女らの日本へのイメージはもちろん学校教育によっても築かれていたが、もう一つは、接する日本人たちの影響もあったことがうかがえる。今回の聞取り調査の対象者は、すべて日本統治時代に学校教育を受け、今も日本語を流暢に話す、つまり「同化」した世代の人々である。当時から日本人と同じレベルで日本語ができたため、日本人との文化的接触も多かった。インタビューをした一人の女性は、日本人が多く通う台北第一高等女学校での日本人生徒が終戦後、学校を立ち去る日のことを鮮明に記憶していた。その日、日本人生徒全員で教室を隅々まで磨き上げ、校庭を掃き清めた後、学校に生えている木の葉をいとおしそうに摘み、泣きながら、立ち去っていったという。台湾人生徒はそれを並んで見送ったが、そのときの姿が今も忘れられないと語った。台北市という都会の学校での一つの事例ではあるが、日本のイメージ形成において、憧れを抱くにいたった背景には、教育だけではなく、日本人との深い文化的接触と相互理解があったことも指摘しておく必要があろう。

日本への憧憬の念を強く抱く「同化」世代に対し、その親の世代は、また異なるイメージを日本に対して抱いていたことが、同化世代が語る親についての話や小説などからもうかがえる。

同化世代の親は、日本統治が始まった頃（1895 年）に生まれた世代であり、家庭では漢文化に従って生活し、幼少期に漢文による教育を受けた世代である。彼／彼女らにとって、日本は「異文化」との出会いであり、新たな社会的枠組みを導入した為政者であった。彼／彼女らは、台湾社会が日本化していく過程を客観的に眺め、自らも否応なく日本化していくことを認識しながら植民地に生きていくことになった世代である。この世代にあたる作家呉濁流（1900 年生まれ）は、小説「アジアの孤児」（1956 年）のなかで、自分が「日本人なのか台湾人なのか」というアイデンティティの矛盾に苦しむ知識層青年を描いている。また楊逵（1905 年生まれ）も、農村における台湾民衆の姿を描くなかで日本と台湾の間で引き裂かれた存在として

台湾人の苦悩を描写している。
日本文化を異文化として接し、漢文化をその根底に抱く世代は、植民地社会で日本と台湾のはざまで葛藤する男性が多かったと考えられる。一方、この世代の台湾女性は、教育を受けず植民地社会との接触は少なく、そのため男性のように二つの文化の相克という局面は回避できたが、家族がしだいに「日本化」するなかで孤立していく様子が聞取り調査や雑誌記事から浮彫りになった。
以上のように、植民地の人々が日本に対して描いた心象地理は、世代やジェンダーによって差異があった。「同化」以前の世代、とくに男性にとって、漢文化は自我形成の時期に身に付けた文化であり、日本文化は抑圧的に押し付けられた文化であった。同化政策下、学校教育やメディア、プロパガンダを通じて、彼らは日本人としてのアイデンティティ形成を促されるなかで、漢民族としてのアイデンティティの揺らぎに葛藤することになった。
「同化」世代の人々は、漢文化を自文化として認識する前に、同化教育を受け、自らを「日本人」と認識し、日本への憧憬を抱き、異文化として日本文化を相対化することなく、また漢民族としてのアイデンティティを確立することなく、植民地時代を終えた。ことがそれは、聞取りのなかで一人の女性が語った「台湾が日本のものになった、ということはあまり認識していなかった」という言葉にも表れている。

（５）本研究の意義と今後の展望

植民地期に発行された全ての新聞記事と雑誌記事における地理教育や日本の表象についての言説の分析と聞取り調査から、詳細に植民地の人々のアイデンティティを分析した本研究は、植民地研究および人文地理学の分野においてあまり類をみないものといえる。従来のコロニアリズムの言説における支配者による被支配者への抑圧という構図は、植民地社会の実際を描写するものではない。被支配者の異文化の受容の仕方は、世代によっても、ジェンダーによっても異なること、それが教育によって多大な影響を受けていることが明らかになった。しかし、日本人としてのアイデンティティを形成した「同化」世代の人々は、戦後、アイデンティティの揺らぎを経験することになる。二つの異なる文化のはざまに生きる葛藤は、植民地の遺産として引き継がれたのである。これが植民地の終わらない歴史である。
本研究では、植民地台湾における人々の心象地理を研究対象としたが、今後は日本のもう一つの植民地である朝鮮半島において、人々はどのような心象地理を描いたのかをみていく必要がある。植民地下朝鮮の人々が、日本が描き出そうとした世界観をどのように受容・抵抗したのか、それが台湾といかに類似しあるいは異なるのかを明らかにしたいと考える。日本が植民地に追求しそして遺したものは何なのか、そして植民地主義とは何か、という究極的な問いについて考えていきたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
葉　倩瑋　『台湾における地理学』、地学雑誌、第 121 巻、第 5 号、841－855、2012、査読有
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jgeography/121/5/121_121.841/_pdf

〔図書〕（計１件）
YEH, Chienwei (葉　倩瑋) ‘Assimilation or Resistance? Family and Private Space under Japanese Colonialism’,”“The Family in Flux in Southeast Asia: Institution, Ideology, Practice”, Silkworm Books, Kyoto University Press, 2012, 546p., 181-202.

６．研究組織
(1)研究代表者
葉　倩瑋（YEH, Chienwei）
茨城大学・人文学部・准教授
研究者番号：30242332